上唇に発生した小唾液腺唾石症の1例

坂下 英明・宮田 勝・宮本 日出・車谷 宏*

A case of minor salivary gland sialolithiasis occurring in the upper lip

Hideaki SAKASHITA・Masaru MIYATA・Hizuru MIYAMOTO

Hiroshi KURUMAYA*

Abstract: Minor salivary gland sialolithiasis is very rare in Japan.

An 82-year-old female was referred to our department because of a tumor in the left upper lip. Our initial diagnosis was a benign tumor. Under local anesthesia, the tumor was resected. Histopathological examination revealed characteristics of minor salivary gland sialolithiasis

Key words: sialolithiasis (唾石症), minor salivary gland (小唾液腺), upper lip (上唇)

緒 言

唾石症は大唾液腺特に顎下腺に好発し、小唾液腺に発生することはまれである。特に本邦での小唾液腺唾石症の報告は、いまだ少数である。今回われわれは、上唇に発生した小唾液腺唾石症の1例を経験したので、若干の文献的考察とともに報告する。

症 例

患 者：82歳 女性。

初 診：平成4年7月■日。

主 訴：左側上唇部の腫脹。

既往歴：平成3年8月■日、当科において口蓋垂の乳頭腫を切除した。

現病歴：約10日前より、左側上唇部の腫脹に気づくも放置していた。次第に違和感が増大するようになったため、当科を受診した。

局所所見：左側上唇部に、約10×8 mm の正常粘膜色の無痛性であり、弾性軟の腫瘤を認めた(写真1)。自

写真1 初診時写真

写真2 病理組織像 (H-E 染色, ×25)

石川県立中央病院歯科口腔外科

(主任：坂下英明医長)

* 石川県立中央病院病理科

(主任：車谷 宏医長)

Department of Dentistry and Oral Surgery,
Ishikawa Prefectural Central Hospital (Chief:
Hideaki Sakashita)

* Department of Pathology, Ishikawa Prefectural
Central Hospital (Chief: Hiroshi Kurumaya)

受付日：平成4年12月9日

発痛および圧痛は認めなかった。また、所属リンパ節は触知しなかった。

臨床診断：上唇良性腫瘍。

処置および経過：同日、局所麻酔下に腫瘤の切除を行った。術後経過は良好で、異常所見は認められない。

病理組織学的所見：口唇組織とその下方の小唾液腺組織を認め、中央部に小唾液腺の導管の拡張と破裂および

表 本邦における小唾液腺唾石症の発生年齢

年齢	性別	♂	♀	計
20～29			2	2
30～39		2	2	4
40～49		4	1	5
50～59		2	1	3
60～69		4		4
70～79		7	1	8
80～89			1	1
計		19	8	27

唾石を認めた（写真2）。また、同部には膿瘍を形成し、その周囲に肉芽組織・小円形細胞浸潤・線維化を認めた。さらに、唾石は約0.75×0.5mmと小さく、比較的不規則な構造であった。

病理組織学的診断：小唾液腺唾石症。

考 察

本邦における小唾液腺唾石症の報告はまれであるが、海外においては報告は比較的多いとされている¹⁾。

本邦における小唾液腺唾石症の報告^{1)~3)}に自験例を加えた35例を臨床的に検討した。その結果、発生部位としては、上唇が18例、頬粘膜10例、下唇4例、口蓋2例、舌1例であった。従来より上唇部と頬粘膜部に多いとされており^{1)~3)}、本集計でも上唇と頬粘膜の合計が80%を占めていた。Goran ら⁴⁾は49例中上唇23例（46.9%）、頬粘膜15例（30.6%）、Jensen ら⁵⁾は47例中上唇22例（46.8%）、頬粘膜19例（30.6%）、Yamane ら⁶⁾は76例中上唇37例（48.7%）、頬粘膜26例（34.2%）と報告している。このように、上唇と頬粘膜に多い理由としては、これらの部位が外傷を受けやすいこと、口蓋腺などと比較して導管が長いことなどの局所的要因や唾液の性状などの生化学的要因などがあげられている^{1),3),5)}。

本疾患は、男性に多いとされており^{1),3)}、Goran ら⁴⁾は男性29例、女性20例、Jensen ら⁵⁾は男性20例、女性26例、Yamane ら⁶⁾は男性39例、女性37例と報告している。本集計でも、男性22例に対して女性13例であり、男女比は1.7:1と他の報告とほぼ同様の傾向を示した。

発生年齢については、35例中で年齢のあきらかな症例は27例であった（表）。これらの症例は22～82歳に発生しており、本報告例が最も高齢であった。また、70歳代に8例が好発するも、中高年に比較的平均して発生していた。この点も他の報告^{1),3)}と同様の結果であった。

小唾液腺唾石の病理組織学的所見としては、経過の長い唾石では中心部の均質無構造な部位を取り囲むように周囲に層状構造を認めることが多く、経過の短いもので

は全体的に均質で無構造な所見を呈することが多いとされている⁷⁾。本症例では、唾石は比較的不規則な構造であり、大きさも小さく、経過は比較的短いと考えられた。

臨床症状は、無痛性の腫脹または腫瘤形成を主訴とするものが多く、特異的な臨床症状に乏しいとされている^{1)~3)}。本症例においても、無痛性の腫瘤が主訴であった。また、内堀ら⁸⁾は炎症症状を伴った症例は31.3%であったと報告している。このため、臨床的には術前に本症との診断がなされないことが多い。この点について、奥田ら³⁾は本症がこれまでまれな疾患として扱われており、本症に対する知識が臨床的にも普及していなかった点、また、硬固物を触知しても必ずしもX線不透過像が確認されない点などから、診断が困難な疾患と考えている。本報告例においても、術前診断は良性腫瘍とし、X線診査は行わなかった。すなわち、唾液腺の存在する部位に発生した腫瘤形成性疾患においては、小唾液腺唾石症は鑑別診断が必要である疾患の1つであると考えられた。

結 語

本邦での小唾液腺唾石症の症例報告は、いまだ少数である。今回われわれは、82歳、女性の上唇に発生した小唾液腺唾石症の1例を経験したので、若干の文献的考察とともに報告した。

引 用 文 献

- 1) 小林吉史, 寺崎伸一郎, 他: 小唾液腺唾石症の臨床病理学的検討. 日口外誌 36: 2622-2627 1990.
- 2) 山崎康之, 阪本栄一, 他: 上唇に発生した小唾液腺唾石症の1例—その唾石の構造・組成分析について—. 日口外誌 35: 2596-2605 1989.
- 3) 奥田 孝, 安岡 忠, 他: 小唾液腺唾石症の2例. 日口外誌 38: 1311-1312 1992.
- 4) Goran, A. and Louis, S.H.: Minor salivary gland calculi. Int J Oral Surg 12: 80-89 1983.
- 5) Jensen, J.L., Howell, F.V., et al.: Minor salivary gland calculi; A clinicopathologic study of 49 cases. Oral Surg 47: 44-50 1979.
- 6) Yamane, G.M., Scharlock, S.E., et al.: Intraoral minor salivary gland sialolithiasis. J Oral Med 39: 85-90 1984.
- 7) Anneroth, G. and Hansen, L.S.: Minor salivary gland calculi; A clinical and histopathological study of 49 cases. Int Oral Surg 12: 80-89 1983.
- 8) 内堀健二, 中山桂二, 他: 小唾液腺に生じた唾石症の1例. 口科誌 28: 63-74 1979.